

目次

序 揖斐 高	5
秋香集 長歌	7
書誌	7
凡例	7
目次	8
翻刻	13
附篇 新体詩の組織形式	89
書誌	89
凡例	89
翻刻	90
解題 鈴木 亮	97

序

揖 斐 高

成蹊学園史料館には、学園創立者で大正自由教育の旗手と評される中村春二関係の資料が豊富に収蔵されている。その資料群のなかには、中村春二の父で、明治時代に歌人・国文学者として活躍した中村秋香の未紹介遺稿なども多く含まれている。今を遡ること十年近いむかし、成蹊大学大学院日本文学専攻の博士課程に在籍中だった鈴木亮君は、それら資料の調査・整理に意欲的に携わり、成果の概要を「成蹊学園史料館所蔵中村秋香遺稿等分類目録」(『成蹊学園史料館年報』第四号)として発表した。本書はその調査・整理の過程で鈴木君によって見出された、中村秋香作(門人武藤元信編)の長歌集草稿の翻刻と研究である。

今日、秋香は『落窪物語大成』を著した国文学者、宮内省御歌所寄人をつとめた歌人としてわずかに知られるが、文学史的には明治の新体詩人(新体歌人)としての活躍が注目される人物でもある。日本における近代詩は明治十五年に出版された『新体詩抄』に始まるというのが文学史の通説であり、その『新体詩抄』に刺戟されて和歌(長歌と短歌)の改良運動が始まったとされる。そうした改良体の長歌を「新体歌」と名づけて積極的に推進しようとしたのが中村秋香にはかならなかった。したがって本書の表題にいう「長歌」とは、伝統的な五七調あるいは七五調の長歌をいうのではなく、自由な韻律の「新体歌」を意味しているのは、鈴木君の指摘する通りである。

本書には明治の時代精神とでもいべきものが濃厚に匂い立っている。一言でいえば、ナショナリズムとモラリズムの鼓吹

である。こうした要素を近代詩の出発点の中に正當に位置付けるのは、実は必ずしも容易なことではない。しかし、それらが近代詩の出発点における重要なテーマであったことを無視しては、日本近代詩の姿を正しく把握することはできないであろう。鈴木君の手によって翻刻された本書は、そのための具体的な研究資料の紹介として大きな意義を有している。

鈴木君によれば、本書は『秋香集 長歌』上下二巻のうちの下巻のみで、本来あるべきはずの上巻を欠いているという。伝統的な歌集の部立ては、まず四季の部に始まり、恋の部が続き、雑の部で終わるという形をとる。もし『秋香集 長歌』上下二巻がこうした伝統的な歌集の部立てを意識して編集されていたとしたら、本書に翻刻される下巻はおそらく雑の部に当たり、欠けている上巻には四季や恋の「新体歌」が収められていた可能性がある。本書に翻刻される下巻に色濃く見られる国家主義と道德主義^{ナショナルイズム モラルイズム}そして叙事性は、欠落する上巻に収録されていると推測される四季や恋の「新体歌」の抒情性と、どのような相関性を有しているのであろうか。今後、鈴木君にはぜひとも『秋香集 長歌』上巻の発見・紹介を心懸けてもらいたい。これまで幕末期の和歌や国学を主たる研究対象として取り組んできた鈴木君には、その研究によって得た知見を踏まえ、完本『秋香集 長歌』をもとにして、新体詩人（新体歌人）中村秋香の新たな文学的評価を呈示することが期待される。

本書の原稿は、鈴木君が成蹊学園史料館所蔵資料の調査・整理を終えたかなり早い段階で脱稿しており、その時点ですでに公刊する予定になっていた。ところが、予期せぬ故障が起きて公刊の実現が止まっていたのである。こうした事態については鈴木君本人もずいぶんと気を揉んだようだが、このたび武蔵野書院からめでたく出版される運びになった。当初の原稿作成段階から相談に与った者として、安堵の思いを抱くとともに、懸案の出版が実現したことを心から喜ぶと思う。

平成二十四年八月立秋の日に識す。

秋香集 長歌

書 誌

○成蹊学園史料館所蔵

○一冊（下巻のみ存） 仮綴、写本（縦二十四・九釐、横十六・六釐）

○表紙 厚手楮紙

○外題 「秋香集長歌 下」（中央、打付書）

○内題 なし

○蔵書印 なし

○丁数 様々な野紙に書かれた新体詩の草稿を仮綴し、半裁されてゐるものなど形式が不統一のものも存するため、丁数は数へ難い。

凡 例

- 一 底本は、成蹊学園史料館所蔵本を用ゐた。
- 一 仮名遣ひは底本の通りとした。
- 一 漢字、仮名の使ひ分けは底本のままである。
- 一 清濁の別は、底本に於ては厳密に区別されてゐないため、新たにこれを施した。
- 一 朱などで抹消されてゐる場合は、振仮名に限り（一部、注の箇所も含む）、判読出来得る限り（ ）を以て示し

一 作者（中村秋香）自身による訂正がある場合は、訂正後の形を示した。

一 改行については、底本の通りとした。但し、底本追ひ込みの場合は、追ひ込みとした。

一 底本には「、」「。」「『』」「『』」といふ五種類の記号が使はれてゐるが、「、」「。」「『』」に就ては差異が明確ではないため、それぞれ「、」「。」「『』」に統一した。

一 割註は、〈 〉を以て示した。

一 明らかに脱字と思はれる箇所は、「 」（ ）を以て適語を補つた。

軍旗	13
錦の御旗	13
日本刀	14
玉章歌	15
写真	16
行路難	16
破難関	17
遊泳	18
夢	19
ひとり	19

9 秋香集 長歌

湊川神社	46
正行母	46
清少納言	47
博雅三位	47
山内一豊妻若宮氏	48
常磐の蔭	49
丁汝昌	52
あゝ老楽師	53
老将軍	53
軍士の妻	54
燈台少女	55
常磐木刀自	56
橐駝翁	62
笛吹くわかも	63
君子国	65
日本国民	65
東洋半球 三十一年二月	67
海の日本	67
進め矢玉	71

始業式	31
終業式	32
卒業式	32
卒業式	32
卒業証書授与式 答辞の歌	33
開校記念式	33
同窓会	34
東京高等工業学校々々歌	35
埼玉県尋常師範学校々々歌	36
盲啞学校開校式の祝歌	36
神奈川県高等女学校新築落成式祝歌 程ヶ谷岡野新田所在	37
長岡高等女学校 済美会唱歌	38
焼津小学校々々歌	39
遠江国中泉小学校々々歌	39
三韓征伐	40
引田部赤猪子	41
橘逸勢女	42
扇の的	45
小督局	45

襲撃	72
進撃	73
海戦 廿七八年役 以下同じ	73
戦闘	74
征討	75
神の擁護	75
威海衛	76
宣戦詔勅 卅七八年役以下同じ	77
討伐	77
時なり時なり	78
愉快いさまし	78
面もふらず	79
旅順海戦	80
大石橋	81
闇夜の海戦	82
海軍	83
陸軍	84
凱旋 日清	85
凱旋 日露	86

翻 刻

秋香集 長歌 下

○軍旗

其一

日出づる国の、ひいでたる、姿をゑがく、日の御旗、
 きらめく光は、叡聖なる、元帥陛下の、大御稜威、
 濃きくれなゐは、忠武なる、海陸軍の、心のいろ、」

其二

一たび空に、翻^(ひるがへ)れば、黒雲おこり、霧迷ひ、
 山は崩れて、谷を埋め、海^(くつがへ)覆りて、陸^(くが)となり、
 余響は、地球を動かして、万の国に、震ふなり、」

其三

二たび空に、ひらめけば、騒ぎし雲霧、あともなく、
 海山清く、風なきて、高くかゞやく、日の御影、
 あまねく世界を、照しつゝ、仰がぬ国こそ、なかりけれ、」

○錦の御旗